擬人化

修士１年　海老原 寛

私の家では犬を飼っている。名前はエアロ。何の変哲もない雑種である。時間があるときは、散歩に連れて行く。普段はあまり家にいることができないので、自分が散歩に連れて行けるのは１週間に１回あるかないかである。そのように私が放っておいているからだろうか、私が大学から帰り、玄関を開けても出迎えてくれる事は少ない。今日も来ないのかといつもの場所を見てみると、エアロは寝っころがったまま目を開け、こちらを見ている。いつもの場所とは、私のベッドだ。私が帰ってきたことは認識しているようだが、起き上がって出迎えるということはしない。たぶん、めんどくさいのだろう。犬は飼い主に似るというのは、本当のようだ。ただ、本当のところは何を思っているのかはわからない。本当は何を思っているのだろう。

今年の３月に東日本大震災が起きた。多くの人間が犠牲になったが、多くのペットが犠牲になった。言葉は悪いが、すぐに息絶えてしまった動物達はまだマシだと思う。本当にかわいそうなのは、流された瓦礫の上で生きていた子たち、ケージの中に放っていかれた子たちではないかと思う。

地震に伴う福島原発の問題でも、多くの家畜が犠牲になった。避難をするために、畜産家が家畜を置いていかざるをえなかったからである。

ペットにしても家畜にしても、いつも世話をしてくれていた人間が突然いなくなり、食べ物も突然無くなった。この子たちは、何を思っていたのだろう。

先日、調査をしている際、農地を囲うネットにからまっていたアナグマを見つけた。後足がからまってしまったようで、ネットを登っていた。そのうち、わけもわからなくなったようで、地面を掘ったりもしていた。最終的にはネットは自然と外れ、アナグマは一目散に走っていった。野生動物にとって、突然現れたネットはわけのわからないものである。そんなものに突然からまって、不安に思っていたに違いない。つかまっていた時、アナグマは何を思っていたのだろう。

人間は、動物を擬人化することが多い。その擬人化の代表は、動物には感情があるということである。動物達は何を思っているのだろうと書いたが、本当は動物には感情がないのかもしれない。それに関する研究もあるだろうが、本当のところは人間には決して分からない。しかし、人間が動物を擬人化することにより、動物を思いやっているということだけは事実である。

私はサルの農業被害について調査をしているため、農家の人の話を聞くことが多々ある。その人たちは「サルなんていなくなればいい」、「殺したい」と言う。農家にとってみれば、野生動物は農作物を荒らす敵である。そのように思う気持ちは分からなくもないが、サル好きの私にとっては、話を聞いている時間は寂しいものである。

しかし、そのまま話を続けていると、「でも、人間が森を減らしたから悪いんだよね」、「あいつらかわいいところもあるんだよね」という言葉を聞く。その時は、何とも言えない切ない顔をしているのである。

確かにあまりに擬人化が過ぎると、その感情が邪魔になることもある。例えば、シカを殺すのはかわいそうだから、駆除をやめてくれということなどである。必要不可欠な事実を感情だけで覆い隠すのは間違いである。しかし、その感情があるからこそ、人間が人間である価値が生まれることは事実であるのではないかと私は思う。人間とは、「他種を思いやることができる生物」であるのだから。